

4. 日本語アセスメント

アセスメントを限られた時間内にオンラインで行うためには、工夫が必要です。『改訂版 DLA』を参照しながら、次のように実施していきましょう。

1 授業時間以内に実施します。1 授業時間は、小学校は 45 分、中学校・高等学校は 50 分が一般的ですが、自治体によって特徴ある展開がなされていたり、行事が入って短縮されたりすることもあります。学校に 1 授業時間が何分なのかを確認して、準備しましょう。事前に学校と約束した時間内で収まるように進めます。

オンライン・アセスメントは、機材の管理面もあるため、子どもの横に教員や支援員がついているかたちで実施しますが、基本的に教員や支援員は発言せず、子どもとアセスメント実施者のみで応答しながら進めていきます。

(1) 概要

『改訂版 DLA』の次の部分を、1 授業時間で実施します。限られた時間で、特に最後の〈読む〉の部分に十分時間を配分する必要があるので、要領よく進めるようにしましょう。時間はあくまで目安です。特にレベルの高い子どもについては〈読む〉に十分な時間を配分するようにしましょう。レベルの高い子どもについては、〈聞く・話す〉まではさらっと進めて、〈読む〉で 30 分以上取ってもよいでしょう。

内 容		目安の時間
〈はじめの一步〉	導入会話	3～5 分
	語彙力チェック	5 分
〈聞く・話す〉		7～8 分
〈読む〉		25 分
		計 小学校 45 分 中学・高校 50 分

いずれも、アセスメントの内容は、『改訂版 DLA』に準拠して進めます。以下の内容については、『改訂版 DLA』の冊子を参照しながら読んでください。

(2) アセスメント開始にあたっての確認

円滑にアセスメントを始めるために、機材の準備等は休み時間のうちに完了しておきます。学校側の画面でアセスメント実施者が大きく映っているか、アセスメント実施者の声がしっかり届いているか、学校側の音声のアセスメント実施者にしっかり聞こえているか、を確認します。〈はじめの一步〉の語彙カード、〈聞く・話す〉の絵カード等の PDF は、いずれもすぐに画面共有できるよう、画面上に開いて準備しておきます。また、実施者用のメモやスライドなどを画面上に表示しておきたい場合も、開いて準備しておきます。

自己紹介などで示せるように、大きく書いた実施者の名札（ふりがな）などを用意しておいても

よいでしょう。ただし、名札等を画面上で見えるようにするには、下の「オンライン、ここがポイント!!」に示した調整が必要かもしれません。確認しておきましょう。

子どもが画面に写ったら、すぐに録画の許可を得て録画を開始します。

あらかじめ確認しておいた名前で呼びかけ、笑顔で挨拶します。実施者は、親しみを込めて自己紹介し、画面上でこちらの顔がしっかりと見えているか、確認します。

これから始めるアセスメントはテストではないことを伝え、子どもが自信をもって、また、リラックスして取り組めるよう、「適切にほめる」ことを意識して進めましょう（事実を踏まえないほめ方や、大げさなほめことばを連発するようなことは避けましょう）。アセスメントが終わった段階で、子どもが「楽しかった」と思えるような進捗が望ましいと言えます。特に、画面上で初めて会う人と話すオンライン・アセスメントでは、対面より、子どもは緊張しやすかったり、馴染みにくかったりします。対面のアセスメント以上に、リラックスさせる声かけや、適切なほめことばが重要になってきます。

（3）アセスメントの流れと留意事項

① 〈はじめの一歩〉（導入会話・語彙力チェック）

『改訂版 DLA』 p.9～16 参照

オンラインで子どもの緊張をほぐすには、導入会話の段階から、子どもを安心させたり、自己肯定感を高めたりすることを、特に意識する必要があります。導入会話の段階でどれだけリラックスさせられるかが大変重要です。そのためには、次のような工夫が考えられます。

- ・子どもの応答に対して、温かい雰囲気です「(話してくれて) よくわかりました」と伝える。
- ・親子でどの言語で話しているかを質問したり、母語での読み書きについて尋ねたりしますが、その際、複数の言語を使用している場合は、「2つのことばで話せるんですね、素敵ですね」、「○語でも読んだり、書いたりできるんですね。すごいですね」など、積極的に評価する。

語彙力チェックからは、画面共有機能を使うことになります。語彙カードの PDF を画面共有します。必ず、共有した画面が見えているかを確認して、開始します。

語彙力チェックでは「わからないときは、わからないと言っていい」ことを伝え、正誤にかかわらず、リズムよく進めましょう。オンライン・アセスメントでは対面より厳しい時間管理が必要です。

オンライン、ここがポイント!!

多くの Web 会議システムでは、背景をぼかしたり、背景に用意した写真等を使ったりできるようになっています。しかし、これらの機能を使うと、手元に持った紙や物、ジェスチャーを示そうとする手の動きなどには焦点が合わず、画面上に映りにくくなります。手元の紙や物を映したい、ジェスチャーを交えて伝えたい、というようなときは、こうした効果はオフにするようにしましょう。

ただし、正解がかなり少ないことで子どもが自信を失ったり、悲しくなったりすることは、絶対に避けなければなりません。正解した時に「すごいね！」とほめたり、日本語で言えないことばについて「母語では何て言うの？」と聞いて、教えてくれたら「そうなんだね！教えてくれてありがとう！」などと感謝を伝えたりするなどして、子どもの自己肯定感に配慮しましょう。子どもの表情などを注意深く見て、対応することがとても大切です。

全部終わった段階では、できたことをほめて、次に進みます。例えば、滞日年数が短くて正答率が低い場合などについては、「大丈夫！」「よくできたよ！」「日本に来て〇カ月でしょ！すごいね！」などと言うことができます。

② 〈聞く・話す〉

『改訂版 DLA』 p.19～27 参照

絵カードの PDF を画面共有して進めます。限られた時間なので、絵カードは選んで実施します。選び方は、子どもの実態に合わせて工夫しましょう。

子どもの実態があまりつかめていない場合などは、次ページの例のように基礎タスク、対話タスク、認知タスクを 1 枚ずつというやり方も考えられますが、限られた時間を効果的に使うためには、実際にはさまざまな選択が考えられます。事前ヒアリングの情報を活かして、子どもの実態に合わせて工夫しましょう。例えば、読む力がある程度あると想定される場合は〈読む〉に時間を割くため基礎タスクと認知タスクを 1 つずつ実施する、滞日期間から考えて読むことが難しいと想定される場合は、基礎タスクを中心に絵カードを多めにする、などです。また、『改訂版 DLA』 p.22 にあるように、中学生や高校生の場合は、認知タスクの絵カードは使わず、自分の得意な教科で学習済みの概念について説明を求めてもかまいません。いずれにしても、思考・判断・表現を支える包括的なことばの力を見るためには、日本語の表面的な力ではなく、子どもの頭の中でどのような思考が動いているかを意識して、子どもの発話を聞くことが大切です。

オンライン、ここがポイント！！

子どもとの楽しい雰囲気づくりのためには、アセスメント実施者の画面上でのまなざしが重要です。実施者が手元の資料に目線を落としていると、子どもから、実施者は自分の方を見ていないことがはっきりとわかってしまいます。対面と違って、アセスメント実施者と子どもが同じ空間にいない分、まなざしが持つ意味が相対的に大きくなるといえるでしょう。子どもが常に見守られていると感じるような目線になるように意識しましょう。そのためには、p.20 に示したように、PC 画面上に、進め方や子どもへの指示などを記した資料を別ウィンドウで開いておくなどの工夫をするとよいでしょう。

また、オンラインの場合、語彙カードや〈聞く・話す〉の絵カードなどを画面共有していくことになりますが、そこで手間取ると、時間が足りなくなったり、せっかく作ってきた子どもとの楽しい雰囲気が途切れてしまったりします。画面共有の方法を事前にしっかりと確認してリズムよく進められるようにしましょう。

絵カードの選択例

タスク	使用するタスク・カード
基礎タスク	絵カードは1枚。「日課」のカードで、動詞の現在形（習慣）と過去形の使い分け、「～て、～て」のように順序に沿って（時系列で）行動を表現する力をみます。日課カードが難しい場合は、「教室」カード、「スポーツ」カード、「自分の夢」カードに切り替えてもよいでしょう。
対話タスク	絵カードは1枚。日本語のレベルがあまり高くない場合は、「先生に質問」のカードで、トイレに行ってもよいか許可を求めることができるか、教科書を忘れて先生や友達に貸してもらいたい場合に依頼ができるかをみます。レベルがある程度高ければ、「友達を誘う」のカードで、友達との会話をリードして、遊びの内容や時間・場所などを自分から提案できるかをみてもよいでしょう。
認知タスク	絵カードは1枚。教科学習と関連した内容について、まとまりある話ができるかどうかをみるので、タスクの内容は学年によって変えましょう。小学校低学年の場合は、「お話」カードで、3つの絵の中から子どもが知っている話を選び、ストーリーを順序に沿って話せるかをみるとよいでしょう。小学校4年生以上か中学生であれば、「環境問題」カードや「地震」カードなどを使い、教科学習につながる認知的な力がどの程度であるかをみていきます。高校生の場合は、絵カードではなく、自分の得意な教科で習ったことについて話してもらうこともできます。

③ 〈読む〉

『改訂版 DLA』 p.26～68 参照

教科を学ぶために必要なことばの力を測る上で最も重要なのが、〈読む〉の部分になります。このため、日本語のレベルが上がるほど、〈読む〉に多くの時間をあてるようにしましょう。

緊張しやすいオンライン・アセスメントでは、特に、一緒に本を読んで楽しむような雰囲気づくりが大切になってきます。子どもが本の内容に興味を示し、読書が好きになるきっかけづくりとなるような進め方を心がけましょう。

1) オンライン・アセスメントでのテキストの扱いについて

オンライン・アセスメントでは、子どもは手元にあるテキストを読むことになります。このため、アセスメント実施者からは、子どもの手元が見えないというデメリットがあります。例えば、「ことばの力のものさし」における「日本語の習得のステップ」のステップ3及びステップ4の記述文には、子どもが「指で文字をなぞりながら読む」とありますが、それにあてはまっているかどうかは、残念ながら見取ることはできません。他の記述文から判断することになります。

2) テキストの選定について

子どもがどのテキストを選ぶのかは、オンライン・アセスメントでも重要なポイントです。画面の向こうにいる子どもの様子をよく確認して、子どもがどのテキストを選ぶか見ていきます。読み始める前に、テキストの絵や文字を見てもらって、読めそうか、どんなお話だ

と思うかなどを聞いていってもよいでしょう。その上で、冒頭を読ませて、そのテキストで進めるかどうかを判断します。実際に読んでみて、つまずきが大きいと判断したら、下のレベルのテキストを読むように働きかける必要があります。

『改訂版 DLA』の p.27 の「テキストの対象年齢枠」を参照するとともに、それぞれのテキストに関する説明の最初のページに示されている「テキストについての補足」をしっかりと読み、適切なテキスト選定になるよう十分留意しましょう。

3) あらすじ再生の際の注意点について

オンライン実施の場合、あらすじ再生にあたって子どもがテキストを閉じているかどうかは、画面からは見えません。「テキストを閉じてください」としっかり伝えた上で、子どもに画面上でこちらを見てもらうように指示するなどして、再生を促していきましょう。

内容がよく理解できていないときには、一緒にテキストを見ながら、理解のための支援をしていきます。テキストを開いてもらって、ポイントになるような箇所について質問を投げかけたり、確認したりしながら、内容理解に導いていきましょう。「わかる」「おもしろい」という感覚を少しでも味わえることが大切です。DLA は単なる評価ツールではなく、子どもに学びの機会を提供し、やる気を引き出すためのものだということを忘れないようにしてください。

4) 〈読む〉の終わりに

アセスメントの最後になりますので、がんばったことや、よかった点を挙げて、しっかりとほめて終わります。

子どもとのやりとりが終わったら、付き添っている先生にお礼を言って、Web 会議を終わります。

